

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | "グローバルゼーション"の表層と古層：繰り返す「啓蒙」と「疾風怒濤」                                                                                                                                                                                |
| Sub Title        | Oberfläche und Tiefe der Globalisierung                                                                                                                                                                           |
| Author           | 条川, 麻里生(Kumekawa, Mario)                                                                                                                                                                                          |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会                                                                                                                                                                                                        |
| Publication year | 2006                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.2 (2006. 12) ,p.281- 297                                                                                                                       |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | Essays in Honour of Profressor Takahiro Shibata                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0281">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0281</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“グローバリゼーション”の表層と古層  
— 繰り返す「啓蒙」と「疾風怒濤」 —

Oberfläche und Tiefe der Globalisierung

糸川 麻里生

Mario Kumekawa

いわゆる「グローバル化」、「グローバリゼーション」の問題は、経済、政治の分野だけにとどまらず、思想的なテーマとしても、我々に様々な問題を突きつけつつある。市場原理が決定する「価値」の支配、生活様式の画一化、「マス」レベルでの諸関係の急速な複雑化と規模の増大、等々の問題だ。これらの問題は、ベルリンの壁崩壊以降の国際政治情勢、さらには情報テクノロジーの進歩などと相まって、きわめて「現代的」な問題群として我々の前に見えているようだ。しかし、たとえば哲学史家リュディガー・ザフランスキーによれば、こういった「グローバル化」の諸問題は、すでに「近代」の幕開けとともに我々の前に姿を現していた。遅くともいわゆる啓蒙主義隆盛の時代には、その問題意識のうちの多くが顕在化し、多くの知識人によって共有されていた。思想的問題としての「グローバル化」は近代とともにはじまっていたのである。そのような文脈において、興味深い人物像として浮上するのが、ハーマンやヘルダーといった、「疾風怒濤の先駆」とされる思想家たちだ。「普遍的

理性」や「世界規模の思想」を批判し、普遍的思想家たるカントに異議申し立てをする彼らは、現代における「アンチ・グローバリゼーション」の立場を18世紀においてすでに先取りしているかのようにも見える。本稿では、そのような思想的問題としての「グローバリゼーション」の文脈の中で、「啓蒙」と「疾風怒濤」の関係図式を捉えなおしてみたい。また、その作業過程において、「近代」という問題圏がどの程度の広がりを持っているのかも、おおまかにではあるが再検討できればと思う。

## 1. グローバリゼーションはいつ始まった？

グローバリゼーションに関する思想上の議論の多くは、おそらくそのほとんどが目新しいものではない。ザフランスキーは、著書『人間はどこまでグローバル化に耐えられるか』の中でプラトンから現在に至る西洋思想史の中に登場した「グローバリゼーション」に関連する言説を紹介し、その問題の構造を思想史的に明らかにしようと試みている。たとえばザフランスキーが引用するのは以下のような文章だ。

大企業が世界市場を作り上げた…生産の持続的な大変革が……新時代を画している…全ての強固な状況は錆びついて、年ふりて威厳を備えた表彰や見解の結果ともども、解体される…全ての身分階級、慣例は霧消し、すべての聖なるものの神聖さは失われる。<sup>1</sup>

今はまだ、小さな田舎の町とその近郊は、その持っているもの、その現状、それが知っているものとともに閉じこもっていることができる。しかしまもなくこんなことはなくなるだろう。町は全般

<sup>1</sup> リュディガー・ザフランスキー：『人間はどこまでグローバル化に耐えられるか』（山本尤訳・法政大学出版局）2003年、13頁。

的な交流の中へ引き入れられ、やがては、すべてのものとの接触に満足できるように、ごくわずかな人が知り、できねばならないことが、今よりはるかに大きなものになるだろう。国家は……こうした知をまず最初に手に入れて、先頭に立って進み、他の国家を疑問視することさえできるようになるだろう。<sup>2</sup>

このふたつの引用はともに19世紀中葉にドイツ語で書かれた文章で、前者はマルクス＝エンゲルスの『共産党宣言』、後者はアーダルベルト・シュティフターの代表的長編小説『晩夏』の一節である。前者は革命家の手になる政治論文であり、後者は保守的とされる芸術家によって描写された時代状況である。しかし、このふたつの引用からは、現在「グローバリゼーション」と呼ばれている現象の主要部分が当時すでに始まっていたことが読み取れる。ただし、不思議なことに、当時「始まり」もしくは「予感」として感じ取られていたこの出来事は、その後の150年の間、くり返し「始まり」続けているのである。

ザフランスキーによれば、グローバリゼーションのほとんどの要素は、すでに近代の始まりとともに出揃っていた。たしかに、強力すぎる破壊兵器や広範囲の病気の流行、資本主義経済システムの浸透といった比較的最近の現象はグローバリゼーションへと関心と危機意識を高めてはいらぬものの、ザフランスキーにとって思想的問題としてのグローバリゼーションはすでに近代とともに眼前に横たわり続けてきた。すなわち、地球規模の人類社会を想定し、有効な社会思想をつむぎだそうとすることこそ、グローバルな視点を持った思想の課題となる。

---

<sup>2</sup> 同上。

## 2. 過大要求としてのグローバリズム

ザフランスキーは、この「グローバルな視点を持った思想」は、人間には重過ぎる課題であると主張する。普遍的な地球社会、人類社会について現実的に思考することは、近代においては、なんらかのイデオロギーを設定するのではなければ、膨大な労力を必要とする技術的な作業の塊となってゆき、圧倒的な情報の量でもって、人間の存在を圧殺してしまうというのである。そのような状況になおも対抗しようとする態度「グローバリズム」を、ザフランスキーは基本的に不可能であると見なす。

グローバリズムは過大要求の一徴候であって、グローバル化に耐えられるものは誰もおらず、それゆえ、さまざまなイデオロギーで囲い込んだり（ネオ・リベラリズム、多文化主義など）、没落幻想や救済幻想に逃げ込んだりする。もちろん、冷静で、政治的経験豊かで、正義感に駆られて、グローバル化の諸問題との実際的な取り組みもなされている。（…）にもかかわらず、あるいはまさにそれゆえに、グローバルなものが経済、メディア、政治、戦術、対抗戦術の闘技場になっているといえよう。それはもはや、神学や形而上学、普遍主義やコスモポリティズムの考えた全体的なものではなく、経済的、技術的、政治的な加工の対象である全体的なものである。グローバルな尺度での独特の萎縮感はそれゆえである。すべてが、悪い知らせまでもが、何らかの仕方で良く知っているものように思われる。世界のすべての地域からグローバルな命令が響いてくる。<sup>3</sup>

一方で、万人の万人に対する戦いを克服するためのグローバルな社会

---

<sup>3</sup> ザフランスキー：79頁。

形成という試みがなぜ矛盾を含んだものに終わらざるをえないのか、という問いに対し、ザフランスキーはプラトンが『ティマイオス』において「ティモス」と呼んだ「差別化への激情的な要求」をもって答えようとする。人間が意識的動物である限り、「自分」を意識しようとするのは必然的な衝動であり、そのためには「私」は他人とは違っていなければならない。しかも、その自他の区別は、自分にとって有利な区別でなければならない。そのような区別を生み出そうとする衝動が「ティモス」であり、これこそが社会にダイナミズムを与え、歴史を推進してきた力であるというのである。人間がグローバルな思想的立脚点を獲得しようとするなら、このティモス的衝動をいかにしてその思想の中に収めるかを考えなければならない。

ザフランスキーにとって、そのような努力の先駆者がカントである。カントにはユートピアを夢想する傾向は薄く、世界平和が実現するためのチャンスをあくまでも「法」と「正義」の形式主義の中に見ていた。善意の支配者による平和を信じず、平和を実現する「システム」の成立に賭けていた。ただ、そのための3つの前提、すなわち、「民主主義の発展」、「世界貿易の発展」、そして「公共性の領域の増大」は、今日の世界平和の前提としてはあまりにもナイーブなものとなっている。「民主主義の発展」のために大量殺戮が正当化され、「世界貿易」が帝国主義を生み出し、マスメディアの発達戦争への大量動員を可能にすることなどは、カントの想像力の及ぶところではなかった。ザフランスキーがカントを評価するのは、カントが「尊厳」あるいは「崇高」の概念をよりどころとして、ティモス的情熱の克服に挑んでいる点だ。すなわち、自己認識、自己主張の衝動は、また人間の誇りにも訴えることがありうる。自己主張が「誇り」の感情と結びついたとき、自己保存のために仕える「悟性」のレベルを超えて、ティモス的情熱をもある程度自らの中のみ込んだ「理性」を築き上げることがありうる、というのがカントの希望だった。そのような理性は、場合によっては己の身を犠牲に供する。自己認識と

自己保存の衝動を自己犠牲さえ可能にする「尊厳」の感情と結びつけることこそ、啓蒙という思想の作業が、「宗教に取って代わるエトス」を生み出す過程となるはずだった。

言うまでもなく、現状はカントの希望とは反対の方向に進行している。近代、また啓蒙の帰結として、むしろ近代以前よりも危険な宗教が林立し、原理主義もますます力を増してきている。とりわけ、グローバリゼーションが特に経済面において多くの敗者を生み出す状況にあっては、敗者の側で続々と新しい「神」が生み出されている。しかも悪いことに、グローバルな問題のレベルにおいて支配的なのはけっして人類普遍の理性などではなく、きわめて限定された小集団の利益に関する計算なのである。ザフランスキーは現状を以下のように嘆く。

実際にグローバルに考えられ、ローカルに行動されるなら、よろこばしいことであろう。しかし、通例は、それが逆なのであって、グローバルなプレイヤーはこの上なく偏狭で、ローカルな自己の利益を追い求めている—もっともグローバルな射程をもってである。<sup>4</sup>

### 3. 「個」と「疾風怒濤」への回帰？

かくして、グローバリゼーションに正面から対抗する試みは、ほとんど自己否定のような形で破綻する。いまやザフランスキーは、過大要求としてのグローバリズムを回避し、再度「個人」の次元へと立ち返ろうとする。ジャンパティスタ・ヴィーコ言葉を借りて、グローバル化した世界という新しい「森」の中に「ルクス（空き地、目）」を開こうとする。「個人」こそが近代ヨーロッパ思想の精華であって、個人が生き、活動できる場を確保することこそ、ヨーロッパ思想がくり返し立ち返るこ

---

<sup>4</sup> ザフランスキー：64頁。

とのできる確実な土台である、というのである。グローバル化した世界にあっては、メディアを通して世界中のあらゆる難問があたかも身近な問題であるかのように突きつけられてくるが、ザフランスキーはあえて精神的な免疫システムを作動させて「個人的」な空間を確保せよ、というのである。グローバリゼーションの時代においては、文明もまたそのままでは居住不可能な「第二の自然空間」として立ち現れてくる。したがって、再度人工の足場を築かなければ、わずかなりとも視界を確保し生きるための空間を作っていくことはできないというのだ。

こうした発想は、ドイツ語圏の社会科学において支配的なニクラス・ルーマンのシステム理論の影響を受けていることはたしかだろう。ルーマンは、社会、生命、心理など様々な領域の現象を須らく「システム」として考察の対象とした。ルーマンにおけるシステムは、複雑過ぎて「環境」たりえない外界から「縮減 reduzieren」という作業を通して自分にとっての環境を作り出し、そのことによってまた自らをもシステムとして形成するという、自己言及的あるいはオートポイエーシスのシステムである。「個人」をもシステムととらえるとき、それはグローバル化した世界の「一部」ではなく、自らと環境とを同時に作り出す「全体」となる。そう考えることで、個人はグローバリゼーションの中の矮小化あるいは抹殺を免れるのである。

しかし、ザフランスキーにとってより本質的な思考モデルとなっているのは、十八世紀以来のドイツ伝統の「啓蒙対反啓蒙」の図式のような。「ルクス」という言葉をヴィーコから引いてくるところにも、それはうかがえる。ヴィーコはイタリアの人ではあるが、ハーマンやヘルダーといったドイツの反啓蒙思潮の思想家たちの先駆と見なされているからだ。近代の啓蒙思潮とともにグローバリゼーションの諸問題がすでに顕在化していたとすれば、ヨーハン・ゲオルク・ハーマンとその弟子ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーによる過激なまでの反啓蒙主義運動すなわち疾風怒涛（シュトゥルム・ウント・ドラング）は、グローバル化さ



れてゆく世界に対抗する最初の思想的抵抗であり実験であったと見ることもできる。さらに、十八世紀当時のヨーロッパ文明のスタンダードであったフランス文化に敵愾心を燃やしたハーマンの態度は、現在の反グローバル化の態度がしばしば反アメリカ的思考と結びつく状況と平行であるとも言える。ハーマンは、西欧を覆おうとしていたフランス文化に対してだけでなく、あらゆる合理主義的思考、進歩的思想、普遍的理念を罵った。カントの友人ではあったが、その思想体系に対しては、しばしば苛烈な敵対者であった。アイザイヤ・バーリンは、疾風怒濤の開始者としてのハーマンを、その後ドイツロマン派の詩人たちを経て現代に至る近代批判の系譜の最初の人物とみなしている。バーリンは、ハーマン的伝統は、時にきわめて生産的かつ魅力的な、時に恐ろしく危険な反合理主義的思想の温床となってきた、と見る。

ハーマンは研究に値する。彼は全く独創的な近代批判を行った数少ない人物の一人だからである。完全な支配権を確立した正統（オーソドキシ）に対して彼は——知られている限り——他者を頼むことなく、攻撃をしかけている。その際に彼が用いる武器のあるものは時代遅れであり、またあるものは無効ないし非常識である。しかしそれらの武器には相当の威力があり、まさに敵の進攻をくい止め、反動の旗の下に同盟者をまとめあげることができる。十八世紀の啓蒙と理性の進軍に対する世俗的なレジスタンス活動——こうしたことを行った者がいたといっただけの話だが——を開始しうだけの力があるのだ。実際に起こった抵抗運動は、やがてロマン主義、反啓蒙主義、政治的反動へと高まり、芸術形式の革新に関して深大なる影響を及ぼし、ついには人間の社会的・政治的な生活に対し永續的な打撃を与えるに至った。<sup>5</sup>

ザフランスキーにおける「ルクス」の発想も、ハーマンから発してハ

イデガーを経由する近代批判の文脈の中にある。ハイデガーが言葉と真理が可能になる場所の名としてしばしば用いた「開かれ (Lichtung)」という語も「ルクス」の訳語であるからだ。だとすれば、その思想の有効性はひとまず措くとしても、ザフランスキーの思考の枠組みは、近代－反近代、啓蒙－反啓蒙といった対立的図式の中にあると言えよう。すなわち、プロであれコントラであれ、そこでは、「近代」という枠組みの中でグローバリゼーションという現象もまた把握されているのである。カントの哲学に沿って思索を行ない、その限界に達したと考えたザフランスキーは、そこからカントの最大の敵対者であったハーマンの方向へと舵をきったようにも見える。だとすれば、そこに浮かび上がるのは近代のアポリアそのものだ。

#### 4. ポストモダンのグローバリゼーション ——外部なき〈帝国〉

一方、近年「グローバリゼーション」をキーワードとして政治思想を語る際に最も多く言及される書物が、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートによる『帝国』だろう。たしかに、このラジカルな左翼知識人たちの手になるユニークな著作は、近代の枠組みとは異なる、いわゆるポストモダンの視点でグローバリゼーションという現象の考察を試みている。ザフランスキーの思考法と決定的に異なる点は、そこではもはや近代と反近代、正統と非正統、権力と反権力という二分法の図式が、少なくとも単純な形では存在しえないという点だ。ネグリ＝ハートは、ソヴィエト連邦崩壊以降、市場と清算回路のグローバル化の中で浮上してきた「新しい主権の形態」もしくは「支配の新たな論理と構造」を〈帝

---

<sup>5</sup> アイザイア・バーリン：『北方の博士 J. G. ハーマン』（奥波一秀訳・みすず書房）1996年、4頁。

国〉と呼ぶ。この〈帝国〉は、むしろアメリカ合衆国と深い関係があるものの、合衆国それ自体ではない。あくまでも「グローバルな支配形態」なのである。

近代的批判は、近代性の二元性を告発することによってずっと打ち込んできた。そのため、これには長い伝統が存在する。しかしながらそうした批判的伝統の立脚点は、近代性それ自体の典型的な場所のなかに据えられているのだ。その場所とは、そなわち、「内部」でも「外部」でもあるところ、言い換えれば闊ないしは臨海地点にあたるころのことである。けれども、近代世界から〈帝国〉の世界へと移行するうちに、時代は変わってしまった。つまり、そうした境界的な場所はもはや存在しないのであり、またそれにともない、近代的批判の戦略ももはや実効性をもたないものになろうとしている。<sup>6</sup>

ネグリ＝ハートは、グローバリゼーションという現象を「近代後」に特徴的な現象として考察しようとしている。市場経済と民主主義が国家を超えたグローバルな「主権」を獲得したかのように見える現在、その主権を握っている〈帝国〉の外部は存在し得ない。なぜなら、この新しい〈帝国〉は超国家的な勢力として国民国家の枠組みを溶解させ、グローバリゼーションの時代にあっては民主主義と市場経済のシステムを国境を越えて浸透させることで、「主権」という概念をまったく新しい次元へと移行させたからだ。したがって、ネグリ＝ハートにおける〈帝国〉は、帝国主義のそれとは直接の関係はない。それは、中心も領域も持たない「主権」であり、文字通りグローバルに働きかけ、あらゆるものを取り込んでいく。

<sup>6</sup> アントニオ・ネグリ+マイケル・ハート：『〈帝国〉』（水嶋一憲他訳・以文社）2003年、237頁。

〈帝国〉への移行は、近代的主権が終わりにさしかかった頃、その黄昏のなかから姿を現わす。帝国主義とは対照的に、〈帝国〉権力の領土上の中心を打ち立てることもなければ、固定した教会や障壁にも依拠しない。〈帝国〉とは、脱中心的で脱領域的な支配装置なのであり、これは、そのたえず拡大し続ける開かれた境界の内部に、グローバルな領域全体を漸進的に組み込んでいくのである。〈帝国〉は、その指令（コマンド）のネットワークを調節しながら、異種混交的（ハイブリッド）なアイデンティティと柔軟な階層秩序、そしてまた複数の交換を管理運営するのだ。要するに、帝国主義的な世界秩序の国別にきっちりと塗り分けられた色が、グローバルな〈帝国〉の虹色の中に溶け込んでいったわけである。<sup>7</sup>

ただし、ネグリ＝ハートの〈帝国〉もまた、近代にその出発点を持つてはいる。近代的主権の終わり、すなわちグローバリゼーションの中で〈帝国〉がその全貌を現わしつつあるとしても、その〈帝国〉が意味するところのもの、結局は「法による国際秩序」にほかならないからだ。

〈帝国〉という問題設定はまず初めに、ひとつの単純な事実によって規定される。すなわちそれは「世界秩序がそこにある」ということだ。<sup>8</sup>

世界秩序を形成する法的な力という意味では、1648年に三十年戦争を終結させたウェストファリア条約以来、ヨーロッパで試みられ続けてきた国際間秩序を成立させる試みは、ハート＝ネグリの〈帝国〉の成立および発展の前提となっている。つまり、国家主権を制限して世界秩序を

---

<sup>7</sup> 同書：5頁。

<sup>8</sup> 同書：15頁。

実現しようとする制度という点で、国家主権を制限する国際条約や国際機関は〈帝国〉の準備段階であるともいえるのである。

## 5. 「マルチチュード」による批判・抵抗の可能性

しかし、カントにおいてもみられたように、世界秩序を目的とする法的制度は、その成立の前提さえ見えない状況が続いていた。その文脈でネグリ＝ハートは、世界秩序を法的制度として考える啓蒙主義的思想家としてカントの後継者ともいうべきハンス・ケルゼンを取り上げる。ケルゼンはカントを引き継ぎ、「普遍的な世界国家」による啓蒙と近代化を模索していた。しかし、ケルゼンにとって「世界国家」の主権の基盤となるのは結局国民国家しかなく、「国民国家に保障を与えること」が世界国家の大きな役割のひとつになってしまうパラドクスの中で、近代的な世界秩序に向けた試みは壁に突き当たらざるをえなかった。今日国際連合が突き当たっている様々な難題の根本にこのケルゼンのパラドクスが横たわっていることは周知の通りだ。

しかし、今日出現しつつある〈帝国〉は、近代とは異なった前提で世界秩序を実現する可能性を示唆している。様々な次元で進行するグローバリゼーションが、主権をいやおうなしに国家から剥ぎ取り、脱中心的・脱領域的権力である〈帝国〉に委譲しつつあるからだ。

したがって、〈帝国〉は世界秩序に向けての新たなチャンスを提供するものだが、一方で別の難題も突きつけてくる。中心なき、領域なき権力である〈帝国〉に対し、どのような批判もしくはオルタナティブが可能であるかという問題だ。批判もオルタナティブも不可能な社会であるなら、しかもそれがグローバルに支配されたものであるなら、もはや人間がなんらかの価値観を持って生きることは困難だろう。しかし、〈帝国〉においては批判すべき権力も、転覆させるべき価値観も、鮮明には見えにくくなっている。グローバリゼーションの進行する世界にあっては、

〈帝国〉の主権は民主主義と市場経済のシステムに乗って世界中に浸透するからだ。民主主義のシステムにおいては、為政者と被政者は基本的に分離不可能なのであり、しかもそれが国境を溶解させるとなれば、権力の「外部」から批判を行うことは困難になる。さらに、市場経済の思想によってあらゆる価値（クローン技術によって、おそらくは人間の身体や生命までも）が相対化され、交換可能なものとされつつある状況では、ヴァルター・ベンヤミンが「アウラ」と呼んだような、現象の一回性に由来する宗教的価値もまた消失する。

ネグリ＝ハートは、このような〈帝国〉の中での批判的な力とオルタナティブな活動の形式を模索する中で、「マルチチュード」という概念を提案する。このマルチチュードは、スピノザが「心的靈感に導かれてその場に集まってきた群衆」を意味する語として用いたのに由来する概念だが、ネグリ＝ハートにおいては、いまだ鮮明な目的やシステムを持たず、しかしながら何かを期待して集まっている無定形の群衆をイメージさせる言葉となっている。このマルチチュードという概念が、ネグリ＝ハートにおいては外部を持たない開かれた支配秩序としての〈帝国〉の中で、オルタナティブを可能にする様々な人間の結びつきを指す表現として用いられる。それは、ドゥルーズ＝ガタリが提案した「リゾーム（根茎）」の概念を継承する発想でもあるが、マルチチュードは具体的な人の集まりをイメージさせる言葉であるだけに、より戦略的、能動的な思想の可能性を示唆しているようにも見える。

マルチチュードの諸活動はどのようにして政治的なものに生成することが可能なのだろうか？ マルチチュードは、どのようにすれば〈帝国〉による抑圧や絶えまない領土の分断に抗してそのエネルギーを組織し、かつ集中できるのだろうか？ こうした問いに私たちが与えることのできる唯一の応答はこうだ。すなわちそれは、マルチチュードの活動が本質的に政治的なものに生成するのは、その活

動が〈帝国〉の中央集権的な抑圧的作動に直接に、かつ適切な意識をもって対峙しはじめるときである、というものである。政治的なものに生成するということは、〈帝国〉の諸々の主導権を認識し、それらと戦うことであり、〈帝国〉に秩序の回復を一貫して許さないことである。<sup>9</sup>

しかし、ネグリ＝ハートにしても、このマルチチュードと呼ばれる「群集」が、どのような政治的プログラムを展開しうるのかは明確に記述できてはいない。〈帝国〉はたしかに「中央集権的」な抑圧的作動を及ぼすものでもあるだろうが、その「中央」はもはやどこかの「当局」を指すものとは限らないため、どのような「対抗」が可能なのかはしばしば不明瞭だ。しかも、すでに述べたように〈帝国〉の主権は外部なき権力であり、単純な批判はもはやナイーブなものでしかない。マルチチュードは〈帝国〉のシステムといわばパラレルに、したがってグローバルに動きながらも、その無定形性を武器として、各場所で臨時の抵抗勢力を形成しなければならない。政治的には明白に左派のスタンスを取るネグリ＝ハートは、マルチチュードの活動のそのような可能な一例として、グローバルに移動する移民としての労働者が「グローバルな市民権」を要求することを提案する。

〈帝国〉のポストモダンの諸条件を考え合わせるなら、もっと一般的でラジカルなかたちでこの要求に修正を加えることができるだろう。まずはじめにこの要求が、資本にとって不可欠である移民を各国が法的に承認することを迫るものであるなら、次にマルチチュードは、移動そのものに対する自主的な管理を要求せねばならない。移動するかどうか、するとすればいつ、またどこへ移動するのか、こ

---

<sup>9</sup> 同書：496頁。

れらをマルチチュードは決定できねばならないのだ。マルチチュードは強制的に絶えまない移動状態に置かれるのではなく、ひとつの場所に留まることを享受する権利をもたなければならない。自分自身の移動を管理するという一般的権利は、グローバルな市民権への本源的な要求である。(…) 空間に対する管理権を再領有し、こうして新しい地図作成術を構想するマルチチュードの力、それがグローバルな市民権なのである。<sup>10</sup>

「グローバルな市民権」などという随分理想的な響きがあるが、統合されつつあるEU内の労働力市場が開放的なものになってきている例などを見れば、必ずしも非現実的な夢想とも言えない。企業活動、市場とともに、労働力市場もグローバルなものになりつつある以上、移動する労働者というマルチチュードが自分たちの立場を意識し、権利を主張できるようになれば、帝国に対抗する力となりうるのである。

## 6. 新たな「共同体」論へ

ザフランスキーが「個人」をヨーロッパ近代の成果として評価し、グローバリゼーションの時代にあつてふたたび個人の空間を確保しようとしたのに対し、ネグリ=ハートは無定形な「群集=マルチチュード」をグローバル化する権力に抗する戦いの橋頭堡とした。ここには、グローバル化する世界という問題を前者が「モダン」、後者が「ポストモダン」の枠組みで考えているのが見て取れる。

ただ、ザフランスキーのように、「個人」を思想の拠点とする場合、やはりその個人の周辺に存在し個人を可能にする「共同体」が、グローバル化する世界の中でどのようにイメージされるべきなのかを語らねばな

---

<sup>10</sup> 同書：497頁。



るまい。システムとしての個人が自己言及的な装置として、ジャングル化したグローバルな社会の中で生の基盤「ルクス」を確保できると考えるなら、「ルクス」とともに生み出されるはずの環境たる「共同体」がどのような形態と性質を持ったものになるのかも合わせて提示されなければ、グローバル化する世界に対抗する人間とは、個人的な感情と信仰の世界に生きる人間に過ぎないことになってしまう。18世紀のアンチ・グローバリズム運動でもあった疾風怒濤においても、ハーマンやヘルダーのように、単なる自我の無制限な拡大とは確実に一線を画す緻密な思想家が存在しえたが、彼らは不当にも、理性と啓蒙の敵対者として、個人的感情と信仰の世界にのみ自らの居場所を見出したかのように受け止められることがしばしばであったし、現在もなおそういう解釈は生きている。

先に引用したアイザイア・バーリンは、ハーマンを疾風怒濤やロマン主義の先駆者とする、一般に流布した立場でとらえ、そこから現代的な意義を読み取ろうとしている。しかしハーマンは、そのような図式だけでとらえきれぬ存在ではない。たとえば川中子義勝は、『ハーマンの思想と生涯』<sup>11</sup>で、ハーマンがキリスト教的情熱と詩的想像力を区別していることの重要性を指摘しつつ、「天才」の概念をロマン派や疾風怒濤からハーマンへと帰せしめるのは間違いである、と指摘している。ハーマンにおける、啓蒙と感性（感情）の問題、啓蒙と宗教とりわけ敬虔主義の問題、また啓蒙と自然の問題は、それぞれ、ハーマンのテキストそれ自体と同様、図式的な把握を許さず、「個人」の文脈と「共同体」の文脈が錯綜した様相を見せているのだ。

ザフランスキー的な思考にもまた、アンチ・グローバリズム的思考を単純な個人主義の次元に還元せず、啓蒙の問題、すなわち普遍的理性と普遍的人間社会という問題の真の姿を、あくまでも具体的な共同体の問題意識に沿って追求することが求められる。なぜなら、グローバル化と

<sup>11</sup> 川中子義勝：『ハーマンの思想と生涯 ―十字架の愛言者』（教文館）1996年

は、啓蒙という歴史潮流の最終段階と言えるのであって、いわばそこでは、共同体論における「啓蒙対疾風怒濤」の最終精算が求められているからだ。

同様に、ハート＝ネグリの「マルチチュード」論においても、集った群衆を導いているはずの「靈感」がどのようなものであるのかは、詳細に追求、考察されなければならない。マルチチュードがいまだ完全には組織化されざる「群集」として、帝国の「中央集権」を免れるとしても、マルチチュードの中には見えざるオルタナティブな共同体への志向が息づいているはずだからだ。

そのような、現代の状況に即した、いわば陰画的な共同体論の作業において、モダンとポストモダンの議論は再度交錯することになるだろう。ヴァルター・ベンヤミンにおける「ペシミズムの組織化」や「群集としての身体」<sup>12</sup>という思想、あるいはベネディクト・アンダーソンがナショナリズムを国民と切り離すことで取り出した「想像の共同体」<sup>13</sup>という概念、またモーリス・ブランショの「明かしえぬ共同体」<sup>14</sup>などは、そのような作業の中であらためて注目を集めつつある。これらの思想は、認識論としての、また政治思想としてのシュールレアリスムを通過することによって、ネガティブなイメージ空間の中で「開かれた共同体」とその成員の「身体と制度の総合としての社会」を論じることができるという点で、高度のアクチュアリティと魅力を持っている。しかし、これを詳細に論じるには、稿をあらたにしなければなるまい。

<sup>12</sup> ヴァルター・ベンヤミン：「シュールレアリスム」、『シュールレアリスム』（晶文社）所収、1981年

<sup>13</sup> ベネディクト・アンダーソン：『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行・増補版』（白石隆・白石さや訳、NTT出版）1997年

<sup>14</sup> モーリス・ブランショ：『明かしえぬ共同体』（西谷修訳、筑摩書房）1997年